

たまいたま 川柳



巻頭言

また新年といひつゝ

願法みつる

古来からの日本の民間信仰の一つに、年明けの目出度さに福徳をもたらす神として七福神が招来されている。その内の純日本産の神（？）は恵比寿天だけ。他はヒンズーや中国産だから、爆買い異邦人の係累とも言える。ともあれ、昨年来日した外国人数が新記録とのこと。まさに福の神様々・と言いたいところだが、それが単に経済的な目線だけでは淋しい根性ではないか。ところどころで年が新たになるとナニがどうなるのだろうか。単純には暦が約束通り一日進むというだけのこと。その因習の瞬間にも時計は刻々と進み、列車は淡々と走行し、人間は呼吸を続け、喜怒哀楽は絶えることがない。

幼い頃は、歳が増えると思つてはみたが、年経るに従つて苦痛になってきた。では年が明けるとナニが変わるのか、代わるのか・替わるのか・換わるのか。屁理屈は兎も角、何故か慌ただしく年の改まりを感じる。川柳的吐息にもそれらしい分別が現れる。そう、まさに世に連れ人に連れながら、川柳世界に漂う空気の味が換わつてゆくような微かな予震を、老いた五感が覚知するのだ。川柳文芸の未来像が、新たな混沌に漂うのだろうか。「晩節の風に程良い西の笑み」。焼き鳥をしみじみ味わう気になった新年の御挨拶です。

日日は好

願法みつる

去年今年天秤棒が刻の橋
オメデトウ素直に言えた福の神
寝るも佳し働くも佳し三が日
観音が千手で救う莫迦ひとり
安息日神様だつて休みたい
大乘も小乗もない渡し船
断捨離を決め奪衣婆に呆れられ
辿り着く浄土の門は祝祭日
鉢植えの青葉に冬の血の滾り

平成29年
1月号 (No.686)

日川協加盟